

この子供たち

(9)

イーディス・ウォートン作
松原至大訳

オールドの意味

「ジュディスさんは、あなたがお力を貸して下さるのを、頼みにしております。あなたがここにいらっしゃるか、どうか、心配したのは、そのためでございました。それにもちろん、時間があるように思っています——よく考えて、よい方法を選び出す時間は、あなたのおっしゃるように、私どもが見つけられるとしても、それまでには、いく日もかかるものと、ジュディスさんは思っています。置き手紙をしてきたことを、あの人は、申し上げたと思いますが……ボインさん」と、スコープはまじめな調子で、言葉を切ってから、また口を開いた。「普通の場合でしたら、私はどんな偽りごとも、決して許しはいたしません。子供たちも、そうしたことには、私がきびしいと、あなたさまにお話いたしましょう。でも、今は特別な場合でござります。ジュディスさんは、あの手紙に、私どもはアメリカに行くと書きました。そうしますと、父親は、アメリカ探しに行くと思ったのです。従つて私どもは、少しの余裕を持つことができます。私どものつているはずの汽船は、十日たたなければ、ニューヨークに着きませんから。」

年はのいかないジュディスの考えたこととはいえ、この計画は、いかにもばからしいものであった。だが、ボインは、その点にはふれなかつた。そしてただこう言つた。

「そうだと、結構ですが。しかしその間、あなた方は、どうやって暮すつもりですか。これだけの同勢では、かなり入費がかかりますよ。」

スコープの顔色は、土色から白になった

「ジュディスさんが、なんとかよいように計ると思います。」

「気の毒な人だ。」と、ボインは思った。「賄金をはたくでしようね。」と言ふと、急に、このあわれむべき青い花がとび出してきた。あのぜいたくと。虚栄と、利己と貪欲と対して、憎しみを感じた。そして「わかりました。」とくりかえして、立ちあがると、手を差しのべた。

「あなたは、あの子供たちの、ほんとうの母親です。どんなことがあっても、私はやつてみましょう。出来る限り——」

スコープの頬のしわを伝って、涙が走った。かの女は、それを隠したが、木綿の手袋で急いでおさえたので、ボインにはわかつた。

「ありがとうございます。天のお助けでござります。私どもが、あなたさまにお会いできましたのは。」

ボインは、スコープの涙にぬれた手袋をかたくおさえ、自分を信頼するようになると念をおした。一たんもどつて、よく考えてみよう。そしてジュディスとテリーの目がさめた時分に、また来ようと言いだした。

ボインが、山荘に着いたのは、十一時を過ぎていた。しかし朝は、幸にも遠くへの散歩の約束は、してなかつた。セラーズは、前の晩ボインに、手紙を書かなければならぬから、あまり早くは來ないようといつてあったのである。清々しいエメラルド色の芝生の中に建てられた小さな家に近づくと、バルコニーにかの女の姿が見えた。そばのテーブルの上には、手紙を書く道具があった。かの女は手すりによりかかつて、いつもボインが来る道をながめていたのである。ボインが手をあげると、セラーズはうれしそうに答えた。

「早くいらして——私、お手紙の紙の中にうずまっています。」

「ばく、ゆうべ來たのですよ。でも、灯が消えていたし、それに、あのコックがこわいんです。」

ボインは、出むかえたセラーズに腕をまわして笑つた。その日は、暖かつた。セラーズはうすい白のドレスを着ていたが、

それが春のような感じを与えた。かの女の顔色は、朝の新鮮さに輝いて、ボインのキスのために、それに血しおがのぼった。

「でも、私はこわくなくって」と、セラーズは聞いた。

「あなたが、こわい——なにをいうんですか。あなたは、ぼくを、おいてきぼりにしたのです。こわがるのは、あなたの方です。ぼくは、抗議をしにきました」

「私が、気をきかしてあげましたのに、お礼をなさい。あなたが、古いお友だちにお会いのようでしたから、私が遠慮したのですよ」

「ぼくは、子供の友だちに会ったのです。ジュディス・ホキータに。それを話そうと思つてきたらあなたは見えなかつた。セラーズの目は、好奇心と興味とで輝いた。

「あのジュディスさんに。ほんとうですか。なぜあなたは、いつも子供だ、子供だとおっしゃるの。私、まさか、あんな……」

「あなただって、ゆうべすいぶん若いつて言つたではありませんか」

「ええ、とても若く見えました。でも、もうおとな」

「いや、おとなじやない。子供ですよ。かわいそうな子供です。そのことを話したいのです。あなたに相談して、意見を開きたいと思います。どんなにぼくが困つてゐるか、あなたは知らないんです」

セラーズは、バルコニーのものとの席にもどつた。ボインは、そばの椅子に身をおろした。ボインの話を聞くと、セラーズの顔色は、また変つた。そして不安そうに、ほほえんだ。

「お困りになつてゐる——あの子のことで」こういつたかの女のほほえみは消えていた。「マーティンさん、あなた、まさか——」

ボインは、目を見はつたが、やがて大声で笑い出した。

「ぼくが困つてる——ジュディスのことで、ばからしい、なにを言うのです、あの子は、まだナースの手を離れてやしない」

ボインは、また笑つた。こんなに思慮のある婦人でも、一人前の男が、男子として相談を持ちかける時ですら、思いもよらないばかりで錯覚におちいるものかと思った。

「これは、全く別の事件ですよ。そんなセンチなことじゃありません。ホキーテ一家に、またいざこざがおこったのです。それで、ジュディスは、子供たちが散り／＼にならないようにと、みんなを連れて逃げてきたのです。なにか起ると、いつも散り／＼になるものだから」

セラーズは目を見はって、唇を開けたまま、ボインを見つめた。

「逃げ出したのですって。どこから」

「ジョイスとホキーテのところからです。突然に飛び出してきたのです。なにも言わずに」

「でも、だれと逃げたのでしょうか。子供たちばかりでは、逃げられやしません」

「女の家庭教師がいっしょです。それからナースが二人。こうした危機に立つと、その人たちとは、みんなジュディスの味方になるのです。ぼくは、今その家庭教師と話しあつてたのだが、その婦人は、すっかり賛成していました。あの連中は、今までに幾度も、こうしたことを経験してきたのですよ」

「家出の経験を」

「いや、今にも家出をしそうな経験です。最近では、ジュディスが、両親にむかって、今度もおとうさんとおかあさんが離婚するようなことがあれば、子供たちをみんな連れて家出をする。この前のように、みんなが離れ離れになるのはいやだからと言つたらしいんです。離れ離れになると、方々にいる前の親に引きわたされるのですが、中にはずいぶんひどいのがあるんですね。恐喝をやるイタリヤの公爵、評判の悪い映画スター、そのほか、どんなのがいるかわかりやしません。それに、多くの考えでは、間ちがいなしに、じきにジョイスもホキーテも、またもともどるから、新しい分子が加わってきます」

セラーズは、両手におとがいをのせて、黙つて聞いていた。ボインが言葉を切つても、しばらくは顔を上げようともしなかつた。その中にやつと低い声で言った。

「あんまりひどいことで、信じられません」

「全く。でも、ほんとうです」

「その子供たちは、どんなに恐しい思いがすることでしょう」

「ジュディスが連れ出したのは、この上恐しい思いをさせたくないからです」「わかりました。ほんとうに、かわいそうな子供」セラーズは、同情でいっぱいであった。「初めのうちは。あまりのことわざで、私はわかりませんでした。今はわかりかけました。で、そのお子たち、あなたが助けて下さると思って、ここへ来たのですわねえ」

「よく考えがなくて、ほんやりと、ぼくのことを思い出したのでしよう。あの手紙にあるように」

「でも、お金のことは、どうするのでしょうか。あなたたって、お金なしでは、育児室にいっぱいの子供を連れて、歩きまわることはできませんわ」

ボインは、まごついた。ホキータ家のようなぜいたくな家には、どこかに余分な貯えもあるだろうし、それに、子供たちを山地へやる用意もしてあつたのだから、どうにかなるであろうと答えた。

「なんということでしょう。子供たちは、どこに――あなたのホテルに、私に会わせて下さいまし」セラーズは、帽子と日傘をとつてきた。

ボインは、この申し出に感じたが、もしセラーズが、今までのことを知らずに会つて、子供たちに驚かされはと、ひそかに心配した。それでジュディスが、子供たちを費用のかからない村の下宿屋に連れて行つたこと、ボインがたずねて行つた時は、小さい連中は、丘へ遊びに行つていたこと、それからジュディスとテリーは疲れていて、まだ眠つていたことなどを語つた。ボインが行つて、ジュディスをここへ連れて来ようかと聞いた。

「最初にあの子どもに、会つて下さる方がよい。一度に七人に会うのではやりきれないから」

七人――まさか、ほんとうに七人いるとは、セラーズも思つていなかつた。ほかの子供たちは後にして、まずジュディスに会うことに同意した。ランチの時間に間に会うように、この山荘に連れてきてほしいと頼んだ。

「知らないおばあさんに会つて、あの子が驚きはしないでしようか」

あのジュディスが、たれかに会って、びっくりするということが、ボインを面白がらせた。またセラーズが、このようなことを言つたのは、ボインにとって、チャーミングなことでもあつた。いづれにしろ、かの女が自分の相談相手になつてくれることが、うれしかつた。セラーズの実際的な眼識は、子供をどうするかという問題について、自分よりもはるかにすぐれた見が得られると思つた。

「だが——」と、ボインは独り言つた。「ジュディスだって、初めからセラーズを感じさせるようなことは言えなかろう。」だから、ジュディスが、天才だなどと予期しないように、話しておこうかと思った。しかし、そのようなことをするのはかえつてセラーズに偏見を持たせることになるかもしれないと思いなおした。会話の中で妙なことがあつても、それを打ち消すジュディスの、生ながらのチャームにまかせた方が、賢明であるとした。なにか注意しなければならないことがあれば、それはそつとジュディスに言つた方がよいと思つた。

だが、一目かの女を見ると、そうした注意を与える必要があるとは思えなかつた。一晩ゆつくりと睡眠をとつたジュディスは、元気をとりもどして、輝くばかりになつた。うす色のリネンの服を着て、ばら色の縁のある大きな帽子をかぶつた姿は、いかにもかわいかつた。ボインを下宿屋の門まで出むかえた。帽子が側の茂みの中に飛びこむのもかまわず抱きついて、髪を乱したまま、うれしそうな目を、すりよせるのであつた。

「今朝は、パンジーのようですね」と、ボインが言つた。ジュディスの短かくとがつた卵形の、ヴエルヴエット・ブラウン色をした目が、熱心に物を聞きたがつて、あの山の花に似ていると思つた。

しかし、ジュディスは、花などには趣味がなかつたので、そのたとえを受け入れなかつた。

「あら、ひどいこと。お葬式の時の花輪に、針金で巻きつけられる花ですわ。私、お葬式なんかに来てるんじゃありません。あなたにお会いできて、とてもうれしいのです。私たちと、ランチを召しあがりになります。子供たちは、大喜びいたしましよう。みんながここへ來ることを賛成したのも、一つにはあなたにお目にかかると言つて、私が約束をしたからです。ブランカとジニーは、初め反対しました。あの子たちは、いつでも母と争うと、なにかしらよいことが、なくなるものと思つてゐるのです。でも私は、あなたにお目にかかるべ、よいことがあるつて言いきかせました」こういつて、ボインを家の方へ

ひっぱつて行つた。

ボインたちは、小さな居間にはいつた。そこはニスと、みやまうすゆき草の香がして、剝製の鶯が、ストーヴの上においてあつた。ジュディスは、ソファにかけると、そのそばにボインをかけさせた。

「マーティンさんは、どんなブティックがお好き?」

「やあ、ブティックまで。でも、ランチは——」と、ボインが言いかけると、ジュディスは立ちあがつて、かしこそな笑いを見せた。

「では、やつぱり。ボインさんは、女の方とお忍びで、それで、ランチには、おいでがないのでしよう。私、だから、スコープに言つておきましたの——」

「ジュディスさん、つまらないことを」

「まあ、どうしてつまらないこと。どうしてマーティンさんが、女の方とここにいらつしやつては、いけないの。ブーエートアンコール トレ ピアン、モン シエール……(フランス語、ほんとうに幸福な方、私の親愛な……の意味)といいかけてジュディスは、くぼんだまぶたを半ば閉じて、思わせぶりなまなざしをした。

「よしなさい。そんなマニキュアのような、言い方をするものじゃありませんよ。実際のところ。あなたに会いたがつてるオールド・フレンドがいるんです。その人は、親切に言つてゐる——」

「それ、オールド・レディー・フレンド」

「そうです」

「スコープのよう、お年より」

「いや、多分あなたのおかあさんよりも、若いかもしれない。ぼくは、ただ、こう——」

「母よりお若いのなら、オールドなどと、なぜおつしやるの。おきれいな方でしょ。その方、母のよう身なりはしていらっしゃらないと思います」ジュディスは、さぐるように言った。

「ぼくにはわかりませんよ。そんなこと、考へてもみないが——。ぼくが、オールドといったのは、永年の友人といふこと

です。その人は、ホテルの上の丘にある別荘にいて、今日、あなたをランチに呼んでくるように、ぼくに頼んだのです。

「私を、私だけを」。ジュディスは驚いて、こうたずねた。

ボインは、ほほえんだ。

「あの人は、みんなを呼びたいにちがいない。チップ君もいつしょに。けど、家がせまく、みんなはいれない。ぼくは、君を紹介したくてならない。あんなよい相談相手はないんですから」

ジュディスは、身体をかたくした。

「私、あなたのほかには、どなたの言葉もりません。でもマーティンさんが。行つた方がよいとおっしゃるのなら、参ります」

「ぼくが行つてもらいたいとか、どうとかいう問題ではない。ぼくの言葉が、なにか役に立つとすれば、それはあの人と、ぼくが、相談してきめたからだといつてもよい。君たちを救い出すのには、二人でも手が足らない。君たちは、今どんな危いところに立っているのか、知らないんだと、ぼくは思うことがありますよ」

「もしその方が、母よりも若くて、あなたが、その方の着ているものに、お氣がつかないとすれば、あなたはその方を愛しているのにちがいありません」。ジュディスは、こう言つた。ボインの終りの言葉が、耳にはいらないかのように。ボインは、むつとした。

「かりに、ぼくが愛していようが、いまいが、そんなことは関係がない。ぼくが言いたいのは、その人が、ぼくの知人の中で、一番思いやりがあるということです」

(つづく)